

カタルーニャ・クロッシング

カタルーニャと日本。人や企業、そして芸術、生活がクロスする現場を探ります。

第24回 上原 由記音さん ピアニスト、スペイン音楽研究者、琉球大学名誉教授

「カタルーニャ音楽堂では森の中で演奏しているようでした。」

この秋、スペインピアノ作品のスペシャリストである上原由記音さんが、スペイン国王陛下フェリペ六世よりイサベル・ラ・カトリカ十字勲章「エンコミエンダ章」を授与されました。アルベニスをはじめ上原さんのスペインピアノ作品とのクロッシングを早速インタビューさせていただきました。



授のご友人で日本人学校の校長先生が、父親代わりを引き受けてくれました。そしてパリでジャック・フェヴリエ氏に師事することになります。彼はラヴェルの「左手のためのピアノコンチェルト」の正式な世界初演をラヴェルから依頼された人でした。当時パリの日本人留学生はとても少なかったですが、ギターでは福田進一さんがいました。1977年ですから、今と違って情報を得るのが難しい時代でした。

AMICS そもそもですが、当時の日本の音楽大学ではピアノをどう学んで行くんですか？

上原 私の大学では、バッハ、ベートーヴェン、ショパンなどが多く、4年になって近代の作曲家を学びました。バッハは好きでしたけど、例えばベートーヴェンはちょっと苦手でした。作品を貰って弾いていく精神力が私にはありませんでした。数回は良いのですが、何回、何十回と繰り返し練習していくと、精神力を維持することが出来ませんでした。練習していて酸素が足りなくなる感じと言ったらお判りいただけるでしょうか。一方でドビュッシーやラヴェルのように曲の表情、色合いが変化していく音楽が好きでした。スペイン楽曲もそうですが、とても悲しいフレーズもあれば、明るいフレーズもあり、曲の表情が変わっていきます。その明るさもほんのり柔らかいというレベルから、突き抜ける明るさまで広がります。さらには音色という感覚ですね。日本ではとても強く弾かされましたが、フランスでは非常に細かく音を紡ぎ出していく奏法に出会いました。特に師事したジャック・フェヴリエ氏が、感情に色を感じさせ、淡い色から刺激的な色彩をタッチで作っていく技術を持っていました。これは日本では知りえなかったものです。私はこれが私の求めている音楽だと思いました。

AMICS 留学先のパリでスペイン楽曲への扉が開かれていくということですね。

上原 そうですね。最初からスペイン音楽をやろうと思ってパリに行ったわけではありませんでした。しかし、自分自身では気づいていませんでしたが、気質としてはフランス、スペイン系のものが好きだったのでしょね。好きなラヴェルは、彼は母親がバスク人ですが、その頃、私は完全にフランス音楽というイメージで捉えていて、パリへ行くときフランス音楽を学びたい!と思っていたのです。

アルベニス、グラナドス、ファリャ、モンボウなどのスペイン人音楽家

も、かつて皆パリで勉強しました。私が渡仏した時代、パリにはスペイン県人会のようなネットワーク交流がありました。多くのフランス人ピアニストもスペインものを好んで弾いていました。

そんなパリで、私はスペイン作品に目覚める出来事があったのです。ある時、私はラジオ・フランスの「Le matin du musicien(音楽家の朝)」という番組に出演し、その時のプロデューサーのアントニオ・ルイス=ピボ(作曲家、ピアニスト)に出会いました。彼は、エコール・ノルマル音楽院の教授でもあり、彼は音楽院の卒業コンクールに審査員として加わっていたそうです。私のピアノを聴いた彼は「君はスペインものが向いているから、やったらどうか」と強く勧めました。実はその時、私は交通事故で師であるジャック・フェヴリエを失い、とても悲しい状態でした。色々な先生を紹介されましたが、音楽観が合わず、途方に暮れていました。フェヴリエはとても情感豊かなピアニストでしたので、そういう師を私は探していました。ルイス=ピボは私の気質をスペイン人に似ていると判断されたようで、彼から「君みたいな日本人は珍しい。とてもスペイン的だ」と言われ、それから短期間に多くのスペイン作品をつめ込まれました。ピボ先生の指導の下、アルベニスの後期の難曲「組曲『イベリア』」等を一日中、8時間、12時間と練習しました。

AMICS 1980年に帰国されてからは、アリシア・デ・ラローチャさんの指導を受けられることになるのですか。

上原 エコール・ノルマル音楽院を満点の成績で卒業し、演奏家としてのライセンス、いくつかの賞もいただきました。

1980年に帰国後も彼とのレッスンは続きました。自分の演奏をカセットテープに録音してパリのピボに送り、彼からは、細かく注意を書いた手紙が届きました。このような文通によるレッスンや、時々渡欧してレッスンを続けました。ピボはアリシア・デ・ラローチャの弟子でしたが、とても一生懸命に私を指導してくれていたため、アリシア先生に習いたいとは彼には言えませんでした。そんな時、日本で私が所属していた家永音楽事務所の社長の家永勝さんと、アリシア先生を日本に招聘していた神原音楽事務所の神原芳郎社長が、彼女のレッスンをセッティングしてくださいました。その頃、音楽評論家の濱田滋郎先生がアルベニスの「ラ・ベガ(沃野)」を弾いてほしいと楽譜を私にくださっていました。13分を超える、かなりの難曲で、いわゆる判り易いスペインっぽさが全くない曲でした。アリシア先生の来日時に、初めてレッスンを受けるとき、まだその頃、私はスペイン語が話せなかったので、濱田先生が通訳するために同席してくださいました。アリシア先生の前で私が「ラ・ベガ」を弾くと、「どうしてこの曲を選んだのですか」と驚かれましたが、濱田先生が「これは私が彼女に弾いてもらいたかった曲で、私が彼女に楽譜を渡しました」とお話になりました。

AMICS パリが中心だった上原さんに、バルセロナという都市や人はどう映りましたか。

上原 ルイス=ピボにはスペインで集まりがあったら「30分遅れて行くように」と言われていました(笑)。彼はアンダルシア(グラナダ)出身なのです。セビリヤやコルドバとか、確かに時間にルーズな感じがありました。でもバルセロナでのアリシア先生は時間より早くアカデミアにいらしていましたので、びっくりしました。「バルセロナは、こういうところなのだ!」って思いましたね(笑)たまたま早く行って練習していたのでレッスンに遅れることなく良かったのですけれど。とにかく最初のスペイン人の先生との出会いがルイス=ピボでしたから、北は違うのだ!ましてアリシア先生は違うのだ!という驚きでした。

スペインは最初は迷路のような細い道の両側は白壁の家という街並のアンダルシアを訪れることが多かったのですが、バルセロナに着いたときにパリによく似ていると思いました。いくつものガウディの建築物、その曲線には強く影響を受けました。スペイン音楽にはメリスマといいますが、日本でいうコブシ回しのような音の動きがあります。アンダルシアの街にもアラバスクの曲線は多いのですが、ガウディの曲線はさらに空間の広がりななかでうねっています。自然物である植物をモチーフにしても、イギリスのアート&クラフト運動ともアール・ヌーヴォーやイスラムのアラバスクの曲線とも異なる、大きな空間の広がりを感じさせます。写真で見えるのではなくて自分自身がその空間のなかに身を置いたときに感じるものです。これはスペイン作品に向き合う自分の音楽に大きな影響がありました。

©Hiro Ferrari



AMICS 2024年にはカタルーニャ音楽堂での演奏会もされました。どのような印象でしたか。

上原 あそこで演奏できること自体が大変なことですよ!ムダルニスマの時代を代表する世界遺産です。豪華な彫刻や装飾に囲まれ、華やかなステンドグラスの色も素晴らしいホールなので、演奏するのが怖いのではないかと思っていました。圧迫感を感じるに違いない。ところがそうではなく、森の中にいるようで、色々な植物や動物の呼吸がわたしを助けてくれる感じがしました。彫刻からの不思議な息吹に囲まれ癒されている感じで弾けました。日本であのようなホールで弾いたことがないのでわかりませんが、だいたいは冷たい印象で、あの幸せ感には浸れません。

AMICS スペインの作曲家では、あえて言うとなたがが一番好きでしょうか?

上原 全作品というふうに見るとやはりアルベニスになるでしょう。モンボウも好きなのですが、私は手が小さくてモンボウの和音を弾くのが難しいのです。モンボウは手の大きな人で、彼の作品にはその大きな手で掴む独特のハーモニーがあります。それが私の手では届かず、掴めないのです。好きですが、弾けないジレンマがある。もちろんアルベニスも難しいのですが、工夫でこなせます。そして彼はクラシック、ロマン、民族、近代の書法による作品をそれぞれ書いていて、弾いて飽きることがありません。特に後期作品にはステレオタイプなスペイン音楽の印象を超えた普遍性があります。自分で弾く、そして楽曲から作曲家の人生、当時のヨーロッパにおけるスペインを研究する、そんな対象にはアルベニスがいいですね。

【AMICSの眼】

2026年にホアキン・トゥリーナの楽譜を出すとおっしゃっていた。アマチュアが発表会でも弾けるような小品で、アンダルシア色が強いそう。日本ではまだまだ接触の機会が少ないスペイン音楽だが、これから一層それを流布していくという思いが、チャーミングな語り口から伝わってきました。

(取材/文 原正彦)



2025年に上原さんが上梓された著書「アルベニス」(音楽の友社)